



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 2020年度活動報告 CJP授業：漢字・語彙2

著者	中野 陽, 山口 貴史
雑誌名	関西学院大学日本語教育センター紀要
号	10
ページ	57-58
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029359">http://hdl.handle.net/10236/00029359</a>

## 2020 年度活動報告 CJP 授業：漢字・語彙 2

中野 陽 （関西学院大学日本語教育センター）

山口 貴史（関西学院大学日本語教育センター）

### 1. クラス概要

本授業では、初級の漢字、およびその漢字を含む語彙の理解と習得を目標とし、読み書きだけでなく、学習した漢字を使用し、身近な事柄を表現できるようになるための活動が行われている。対象者は必修の総合日本語科目のレベルに対応したクラスを履修することが多いが、個人の学習能力や習得状況に応じて、履修する授業（漢字・語彙 1 から 3 の範囲）のレベルを変更できるような配慮がなされている。週 1 コマ開講で、全 14 回実施されており、主教材は『みんなの日本語 初級 漢字 I・II』が使用されている。

2020 年度春学期は 2 クラス開講され、履修者はそれぞれ 2 名と 1 名であった。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、Zoom を用いた同時双方向型で行われた。

### 2. 授業内容

まず、各学生にとって適切なレベルでの学習を提供するため、初回で具体的な授業活動のデモンストレーションとレベルチェッククイズを実施し、その授業内容とクイズの結果を参考にクラスを履修するよう学生に勧めた。

第 2 回目の授業からは、1 コマ 2 課ずつ 3 段階に分け授業を進めた。学習効果を高めるため、先行タスクとして次回に導入・確認する課の予習プリント（主に読み書き問題）を宿題とした。授業では定着確認と補足情報の提供、および運用練習を行い、翌週にクイズを実施し、課ごとの習得度を測った。

各課の予習課題においては、オンライン上でプリントを配布し、導入・確認範囲の漢字の読み書きの練習や、例文の確認をさせた。授業内の活動としては、学生が予習課題として学習してきた漢字の読み書きだけでなく、書き順や覚え方、間違いやすい箇所、関連語彙の確認等を Zoom の画面共有を用いて、PPT を表示する形で行い、その後、読み書きの練習プリントで習得度を個人で確認させた。また、その他の練習活動では、漢字を用いたビンゴゲームやクロスワード、マッチングゲームなど、クラスメートとの協力・競争を促すアクティビティなども含め、少しでも漢字・語彙の学習に興味をわくよう努めた。各課のクイズは、LUNA（関西学院大学の Learning Management System）のテスト作成機能を用いて作成した選択式のクイズを実施した。

本来、中間試験、並びに期末試験が実施されるが、Zoom による遠隔授業となり、紙媒体での試験の実施が困難であるとの判断により、今期は教員の指示の下、指定漢字を含む短文 30 文を作成するという中間・期末課題を課すことに変更した。試験の前の週に

は、試験範囲の総復習をプリントで行った。

オンライン授業に伴い考慮した点としては、宿題提出や返却、クイズの実施方法、中間や期末課題の内容が挙げられる。宿題などについては、OneDrive を活用し、時間や場所を問わず、提出やフィードバックの確認を行えるようにした。また、各宿題の解答は別紙に書かせ、それを写真に撮り、提出するよう指示したことで、本授業における重要な点の1つである学生の字形の確認を可能にした。さらに、学生により、宿題の解答の書き方などが異なっている場合、教師側の確認がしづらいことも懸念されたため、モデルを提示しながら解答方法を指定し、素早くフィードバックが行えるようにした。クイズに関しても、LUNA の問題作成機能を使用することにより、制限時間の設定や、紙媒体の際に要した採点、およびフィードバックまでの時間の短縮が可能となり、学生もクイズ直後に間違った問題の見直しや点数の確認を行えるようにした。中間・期末課題においては、宿題や授業中に実施される練習プリント、そしてクイズを参考に、学生にとって習得が難しいとされる漢字を選出し、課題に含めたことにより、その意味や読み方、またその漢字を含む語彙の復習を可能にした。また、教科書や練習プリント以外の短文の作成を指示したことで、学生本来の既習漢字を用いた文章表現力を活かすことができた。

### 3. 今後の課題

オンライン化に対応させたことにより、授業全体の管理や各作業効率を向上することができた。一方で、対面授業とは異なり、プリント活動中の机間巡視の際に、学生の字形を確認することができなかったこと、さらに確認できる状況が、宿題と中間・期末課題のみに限られていたことなど、授業内活動で即座に修正・フィードバックを与えることができなかったことが課題として残った。今後は宿題同様に、練習プリント活動後、写真を撮影し、それを共有してもらうことにより解決可能かと思われるが、その作業を素早く行うためのオンラインツールの提供、並びにそのツールを使いこなすまでの準備・練習が、教員と学生ともに必要とされる。

また、筆記試験ではなく、課題になったため、最終的に学習者がどの程度習得できていたのかが十分に確認しきれなかったと言える。今後、本授業がオンラインで実施される場合は、クイズ同様、LUNA での試験作成が必要となるであろう。しかし、試験までオンライン化してしまうことで、全て選択式の問題になる恐れがある。これは、記述式にしてしまうと、パソコンの変換機能の使用が可能になるためである。結果、漢字や語彙を書くということができなくなることが懸念される。一方で、昨今の IT 環境に鑑みると、学習者が手書きで漢字を書く機会は大きく減っている。今後はむしろ同音から文脈に合った漢字語彙が選べることや、ひらがなから漢字に変換する際に長音の有無、特殊拍や清濁を正しくタイプできることを重視した授業デザインに転換していく必要もあるだろう。